

いま、伝えたいことがある

戦争の群像 (後編)

戦時中、阿南ではどのような生活をしてきたのか。当時の様子を語ってもらった。また、戦争遺産を引き継いだり、恒久平和を願う取組を紹介する。

今年も8月15日が訪れた。日本のために犠牲になられた御霊に思いを馳せるとともに、このような時代があったということを、けっして忘れてはならない。



(上写真：防空頭巾、下写真：那賀川鉄橋銃痕跡・阿南風景百選大賞(春) 原 嘉久仁さん撮影)

戦時中、地方のお寺は都市から集団疎開の児童を受け入れていました。私の家もお寺(千福寺)で、大阪から港南国民学校4年生50人と、引率の先生が4人集団疎開してきました。私がちょうど見能林国民学校5年生の頃です。疎開児童は本堂で、先生は客間で寝泊まりし、学校へ通っていました。寝る前に、児童らは大阪の方にむかって「お父さん、お母さん、おやすみなさい」と言っていたのを覚えています。近所の方が炊事で手伝いに来てくれていました。食器がなく、孟宗竹で器を作り、それを食器代わりにしていました。食べ物も不自由しました。自給自足し、麦飯、芋がゆばかり。お米はほとんど入っていません。芋のつるの皮をむいて食べて、腹の足しにしていました。才見町の長善寺にも大阪から国民学校5年生が集団疎開していました。同じ見能林国民学校に通っていて、うちのお寺の疎開児童とよくけんかをしていましたが、年が一つ下なのでようやられて帰ってきていました。その児童らも、敗戦の色が濃くなった頃、三好郡東みよし町の江口駅近くのお寺へ再疎開していきました。また、阿南のお寺から貞光の真光寺というお寺に再疎開した児童が火災で16人亡くなるという痛ましい出来事もありました。今でも命日には縁者が弔いに来ているそうです。



中野 良道さん (82歳・見能林町)

●戦時中の阿南市のようす

戦況が悪化していくと青壮年男子の召集が一段と激しくなり、毎日のように召集令状(赤紙)が伝達されて、若者が戦地へと向かっていった。出征する若者には、一枚の布に1000人の女性が縫い玉を作った千人針を贈って、武運長久を祈った。

また、学生も含めた若い男女から壮年層までが勤労動員や徴用などにより軍需工場へと駆り出された。昭和19年には、旧制富岡中学校(現富岡西高等学校)の生徒も大阪府の枚方や堺にある軍需工場で、特攻隊用の爆弾や航空機部品の製造に携わった。

多くの若者が駆り出されていくなかで、それ以外の分野、また農家は人手不足に悩まされた。筋肉労働や危険作業にも女性が当たり、子どもから老人まで働かざるを得ない状態だった。一般事務や販売店員、車掌など、それまで主に男性が担っていた職業にも女性が多く携わった。昭和20年の那賀川鉄橋列車爆撃事件では、列車に乗り合わせて命を落とした女性車掌もいた。

警防団や隣組単位では、バケツリレーによる消火訓練や屋根に落ちた焼夷弾を消す訓練などの防空演習のほか、敵機や上陸してきた敵兵を竹やりで迎え撃つ訓練も行われた。こうした訓練に参加するのも主に女性や子ども、高齢者だった。

当時の服装は、男性が国民服や軍服姿、女性はモンペ姿で背中に防空頭巾をかけていた。また胸には住所や氏名、血液型を書いた名札を付け、身元が分かるようにした。女性がいろいろいるな行事に出かける時は、「大日本国防婦人会」の白だすきをかけ、戦意高揚に勤めることとされた。

B29が頭の上を飛んでいくのを初めて見た時、私は小学生でした。青空に飛行機雲を描きながら、編隊を作って飛んでいくようすがとても印象的で、目に焼き付いています。飛行機雲を見て、毒ガスをまき散らしているのではと噂する人もいました。私も空高く悠然と飛ぶそれを見て、子ども心に言い知れぬ恐怖を感じたことを覚えています。7人兄弟の末っ子として生まれた私は、戦争へ行った兄の顔を知りません。母は毎日のように神社の境内で、竹やりを使って敵兵や飛行機を攻撃するけいこや防火訓練に勤んでいました。家にはラジオがあり、近所の人がよく聞きに来ました。放送はいつも雑音交じり。内容は日本軍の勝利のことばかりでしたが、誰もがうそ八百だと気が付いていました。

夏の暑い日、友人と西方の川へ遊びに行きました。水遊びをしていると、遠くから米軍の艦載機2機が飛んできました。堤防に上がって身を隠していると突然、機体が急降下し、まぶしい光線が発射されたのが見えました。遠いので音は聞こえなかったものの、頭の中でバリバリと音が響くくらい恐ろしい光景でした。この時、那賀川鉄橋で汽車が襲撃され、多くの方が亡くなりました。もう二度とあの時のようなことが起こらないと、強く感じます。



勢井 友義さん (81歳・長生町)



青木 新太郎さん
(85歳・福井町)

当時、私は旧制富岡中学校の生徒でした。ある時、先生から「明日は、工作道具と弁当だけ、持ってくるように」と言われました。当日、何をしようかと思っていると、みんなで校庭内に防空壕を掘られました。戦況がひっ迫してくると、勉強どころではなく、毎日軍需関係の手伝いにおもむきました。昭和20年の7月には、学校に爆弾が投下されましたが、幸い運動場の端に落ち、10mくらいのすり鉢状の穴が開いていました。終戦後、卒業するまでそのまゝの状態でした。また、那賀川鉄橋で列車が米軍艦載機による襲撃を受けた際には、同郷で同級生の長田 昊（ひろし）さんが亡くなりました。教師をめざして、徳島師範学校に通っており、その通学途中でした。終戦は、祖母の葬儀があった日で、式最中に「戦争が終わった」という話がどこからともなく聞こえてきました。兄（青木 清さん）は陸軍の歩兵部隊に所属しており、終戦の直前の退却戦でビルマ（現ミャンマー）北部で戦死しました。終戦後しばらくは、生死不明とされていましたが、翌年3月に戦死が確認され、親戚一同歩いて桑野町のお不動さん（萬福寺）まで遺骨を引き取りに行きました。



神原 常経さん
(78歳・富岡町)

終戦直前は、毎日のように警戒警報や空襲警報が鳴っていました。いざという時のため、私の家の敷地内にも防空壕があり、警報が鳴るとすぐにその中へ避難していました。徳島大空襲の日には北の空が燃えるように赤かったのを覚えています。私が通っていた富岡国民学校には、大阪からの疎開児童がたくさん来ていました。食事は麦入りの雑炊にキャベツや豆などを入れたものなど、毎日同じようなものばかり食べていたことが印象的です。食糧不足を補うため、校庭には大豆やサツマイモが植えられていました。戦後、私は昭和52年に「戦争を語り継ぐ会」を発足し、25年間、月1回にわたって戦争体験者を招いて講演会をするとともに、内容を冊子にまとめてきました。体験者の思いを次世代へ伝え、記録しなければならなかったからです。当時、戦争の渦中にいる方は自分の命をかけ、国や家族など大切なものを守ろうとしていました。戦後生まれの皆さんには、当時の人が置かれた状況やその思いを理解し、寄り添って、あの時何が起っていたのかをしっかりと知ってほしい。そうすることで、今後戦争を起こさないために何が必要なのか、考えることができるのではないかと思います。戦争で亡くなられた多くの方々に心から哀悼の真心を捧げます。

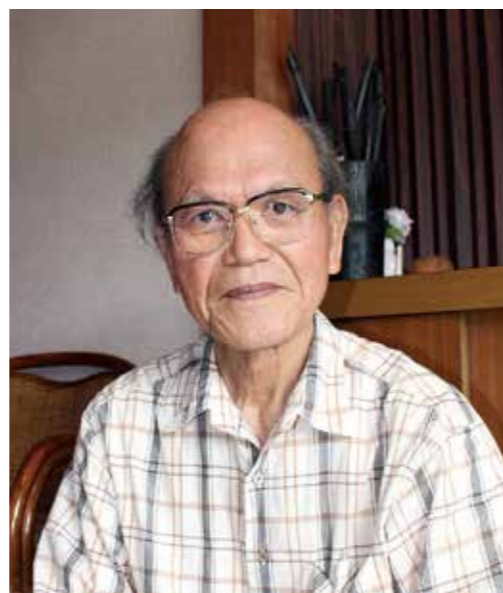
【参考文献】
阿南市史編さん委員会編「阿南市史 第三巻(近代編)」
那賀川町誌編さん委員会編「那賀川町誌 上巻」
羽ノ浦町誌編さん委員会編「羽ノ浦町誌 地域編」
小勝島戦跡調査会編「小勝島戦跡調査報告」
富西百年史編集委員会編「富西百年史」
徳島県警察史編さん委員会編「徳島県警察史」

「一億一心」「ほしがりません勝つまでは」などの合言葉のもと、国民は一致団結して戦争完遂にまい進することが求められた。ラジオや新聞などのマスコミに対しては厳しく検閲が入り、真実とはほど遠い報道が日常化していった。また社会全体が戦争体制のもとに組織され、個人行動が著しく規制されるようになった。生活も次第に厳しくなり、生活必需品も姿を消した。生鮮食品を含む配給食糧は急速に減り、野草を混ぜた雑炊程度の食事で腹を膨らませた。鉄砲の弾などを作るための金属の供出が始まり、各寺院にあった釣鐘から各家庭にあった金属製の火鉢までが対象となった。昭和20年になると全国各都市にB29の大編隊が飛ぶようすが見られるようになった。またグラマンやロッキードなどの艦載機による空襲も始まり、空襲を知らせるサイレンが連日連夜鳴るようになった。各家庭や学校には身を守るための防空壕が掘られ、空襲警報が出ると防空壕に避難して敵機の通過を待った。夜間は灯火管制となり、各家では電球に黒い風呂敷などをかぶせて外に明かりが漏れるのを防いだ。●阿南市内の被害の一部 徳島県における初空襲は椿泊町だった。昭和20年3月14日、椿泊町出島で米軍機による焼夷弾の投下があり、山火事で民家7戸が全焼した。6月16日、椿泊の漁船がバッチ網（イワシ漁）の操業中、米軍の艦載機の襲撃を受け、3人ほどの死傷者を出している。また、同時期に椿泊の漁船が沖合底引網の操業中、網にかかった浮遊機雷が爆発して4人が死亡、2人がけがをする痛ましい事故があった。6月22日には伊島国民学校が米軍艦載機の攻撃を受け、校舎が破壊された。7月24日、B29機が長生上空を徳島方面へ飛行した後、急に1機が前山山頂西方に現れ、急降下して爆弾を投下した。爆弾は、旧制富岡中学校正門北約70メートルの水田中に落下し、付近の民家を破壊した。同校では本館や教室、柔道場などが破片や爆風により被災している。7月30日には、那賀川鉄橋上で艦載機による列車襲撃があった。報道管制のため正確な死者の数は発表されなかったが、30人とも50人ともいわれる。この列車は、徳島駅午後2時47分発牟岐行の下り4両編成で、約1時間後に阿波中島駅を出た直後、鉄橋上で米軍機2機の空襲を受けている。鉄橋上で停止した客車に爆弾が命中し、車両上部が吹っ飛び、鉄橋上を走って逃げる人々に機銃掃射が加えられた。また同日、橋町でグラマン機による空襲があり、海軍施設部橋事務所が機銃掃射され、女子事務員1人が亡くなった。

ある日、兵隊さんが200人ぐらいで、中林港から見能林へ大砲を運んでいるのを見ていました。打樋川に架かる天神橋に差しかけた時、御影石でできた橋が大砲の重みに耐えきれず川の中に、大砲もろとも落ちてしまいました。兵隊さんは、大慌てしていましたが、米軍に見つからないように夜の間に作業して、仮設の橋を架け、大砲は見能林の八幡神社の境内に据えられました。私がちょうど見能林国民学校に通っていたころでした。授業を受けている時に空襲警報が鳴ると、教頭先生が真っ先に学校の運動場に建てられている奉安殿から、天皇陛下と皇后陛下の御真影（写真）と教育勅語を取り出し、それを抱えた教頭先生を先頭に児童が大急ぎで八幡神社の馬場に作られた防空壕まで避難しました。防空壕に入ると、児童600人が学年ごとにむしろの上に座り、身を固くしながら空襲警報が解除になるのを待ちました。八幡神社の防空壕も今はもう埋められてしまって、当時の面影はありません。14歳になった私は、少しでもお国のためになりたいと先生に「航空兵に志願したい」と相談すると、先生から「柏木くんは戦車が向いている」と言われて戦車兵に申し込みましたが、そのまま終戦を迎えました。終戦後は、重機の免許をとって、建設会社でブルドーザーや油圧ショベルの操縦の仕事をしました。

「一億一心」「ほしがりません勝つまでは」などの合言葉のもと、国民は一致団結して戦争完遂にまい進することが求められた。ラジオや新聞などのマスコミに対しては厳しく検閲が入り、真実とはほど遠い報道が日常化していった。また社会全体が戦争体制のもとに組織され、個人行動が著しく規制されるようになった。生活も次第に厳しくなり、生活必需品も姿を消した。生鮮食品を含む配給食糧は急速に減り、野草を混ぜた雑炊程度の食事で腹を膨らませた。鉄砲の弾などを作るための金属の供出が始まり、各寺院にあった釣鐘から各家庭にあった金属製の火鉢までが対象となった。昭和20年になると全国各都市にB29の大編隊が飛ぶようすが見られるようになった。またグラマンやロッキードなどの艦載機による空襲も始まり、空襲を知らせるサイレンが連日連夜鳴るようになった。各家庭や学校には身を守るための防空壕が掘られ、空襲警報が出ると防空壕に避難して敵機の通過を待った。夜間は灯火管制となり、各家では電球に黒い風呂敷などをかぶせて外に明かりが漏れるのを防いだ。●阿南市内の被害の一部 徳島県における初空襲は椿泊町だった。昭和20年3月14日、椿泊町出島で米軍機による焼夷弾の投下があり、山火事で民家7戸が全焼した。6月16日、椿泊の漁船がバッチ網（イワシ漁）の操業中、米軍の艦載機の襲撃を受け、3人ほどの死傷者を出している。また、同時期に椿泊の漁船が沖合底引網の操業中、網にかかった浮遊機雷が爆発して4人が死亡、2人がけがをする痛ましい事故があった。6月22日には伊島国民学校が米軍艦載機の攻撃を受け、校舎が破壊された。7月24日、B29機が長生上空を徳島方面へ飛行した後、急に1機が前山山頂西方に現れ、急降下して爆弾を投下した。爆弾は、旧制富岡中学校正門北約70メートルの水田中に落下し、付近の民家を破壊した。同校では本館や教室、柔道場などが破片や爆風により被災している。7月30日には、那賀川鉄橋上で艦載機による列車襲撃があった。報道管制のため正確な死者の数は発表されなかったが、30人とも50人ともいわれる。この列車は、徳島駅午後2時47分発牟岐行の下り4両編成で、約1時間後に阿波中島駅を出た直後、鉄橋上で米軍機2機の空襲を受けている。鉄橋上で停止した客車に爆弾が命中し、車両上部が吹っ飛び、鉄橋上を走って逃げる人々に機銃掃射が加えられた。また同日、橋町でグラマン機による空襲があり、海軍施設部橋事務所が機銃掃射され、女子事務員1人が亡くなった。

ちょうど私が見能林小学校の中林分校3年生のころです。学校から家に帰る途中、田んぼ道を歩いていると、「ゴー」という轟音が空から聞こえてきました。空を見上げると、津峯山の方から、米軍の爆撃機B29が何十機も隊列を組んで向かってくるのが見えました。とても怖かった。恐怖心から、家まで走って逃げました。爆撃機は大阪方面へ海岸沿いに飛んでいきました。当時は、各家が、防空壕を掘っていました。私の家の庭にも、父親が中心になって家族全員が入れるくらいの防空壕を作りました。空襲警報が鳴ると、大急ぎで防空頭巾を被って防空壕へ逃げ込みました。4、5回は入ったと思います。ある日、空襲警報が鳴って防空壕へ逃げ込みました。しばらくして防空壕から親子3人で出ると、北の方が真っ赤に火事になったように燃え上がっていました。後から知ったのですが、徳島大空襲があった日のことでした。戦時中は、毎日、朝礼の時に、運動場で教頭先生が教育勅語を読み上げていました。戦争が終わると、行わなくなりました。子ども心に、時代が変わったんだなと感じました。



吉積 義幸さん
(80歳・見能林町)

ある日、兵隊さんが200人ぐらいで、中林港から見能林へ大砲を運んでいるのを見ていました。打樋川に架かる天神橋に差しかけた時、御影石でできた橋が大砲の重みに耐えきれず川の中に、大砲もろとも落ちてしまいました。兵隊さんは、大慌てしていましたが、米軍に見つからないように夜の間に作業して、仮設の橋を架け、大砲は見能林の八幡神社の境内に据えられました。私がちょうど見能林国民学校に通っていたころでした。授業を受けている時に空襲警報が鳴ると、教頭先生が真っ先に学校の運動場に建てられている奉安殿から、天皇陛下と皇后陛下の御真影（写真）と教育勅語を取り出し、それを抱えた教頭先生を先頭に児童が大急ぎで八幡神社の馬場に作られた防空壕まで避難しました。防空壕に入ると、児童600人が学年ごとにむしろの上に座り、身を固くしながら空襲警報が解除になるのを待ちました。八幡神社の防空壕も今はもう埋められてしまって、当時の面影はありません。14歳になった私は、少しでもお国のためになりたいと先生に「航空兵に志願したい」と相談すると、先生から「柏木くんは戦車が向いている」と言われて戦車兵に申し込みましたが、そのまま終戦を迎えました。終戦後は、重機の免許をとって、建設会社でブルドーザーや油圧ショベルの操縦の仕事をしました。



柏木 伊豆太さん
(83歳・見能林町)



戦没者追悼式

平成27年度阿南市戦没者追悼式が文化会館で行われ、ご遺族や関係者など約400人が参列しました。今年は戦後70年の節目の年にあたります。ご遺族の高齢化が進み、参列者は年々減少していますが、恒久平和への願いは変わることはありません。式典では、来賓の方々の追悼の言葉のあと、先の大戦で伯父を亡くした今川初美さん（63歳・柳島町）が伯父をしのいで感想文を読み上げました。最後に、参列者は3,141柱の慰霊に献花をし、戦没者の冥福を祈りました。



那賀川鉄橋列車爆撃を語り継ぐ 平和のつどい

多くの死傷者を出した那賀川鉄橋列車爆撃事件の記憶を風化させてはならないと、「那賀川鉄橋列車爆撃を語り継ぐ会」が毎年開催しています。今年は70年前に爆撃のあった日時に合わせて行われ、約60人が会場の那賀川図書館を訪れました。事件の内容を描いた紙芝居や当時列車に乗り合わせた体験者による貴重な講演に、来場者は真剣な表情で聞き入っていました。お世話人の河野孝子さん（70歳・那賀川町）は、「この那賀川町で多くの人が亡くなった事件のことを忘れてはいけません。地域の子どもたちにも伝えていかなくては」と話していました。



戦争体験者の声を聞く

太平洋戦争が終結して70年、戦争体験の風化が懸念されています。「戦争体験者の声に学ぶ」と題した公開講演会（主催：放送大学徳島学習センター）が徳島大学日亜会館（徳島市）で開催されました。体験者の清水依市さん（92歳・美馬市）と森岡博美さん（92歳・桑野町）が当時の模様を生々しく語り、参加者は熱心に聴き入っていました。清水さんは、20歳で出征し、陸軍関東軍に所属しました。満州で終戦を迎えると、シベリアに抑留され過酷な捕虜生活を送りました。森岡さんの体験談は、広報あなん8月号で取り上げています。ぜひご覧ください。



阿南市平和祈念集会

広島に原爆が投下された8月6日にあわせて、第31回阿南市平和祈念集会（主催：阿南市民平和のつどい実行委員会）が市役所新庁舎で開催され、多くの市職員等が戦争や原爆で犠牲になられた方に黙とうを捧げ、平和への決意を新たにしました。また、引き続いて阿南市職員労働組合連合会青年部による反核・平和の火リレーも行われ、青年部員は広島平和記念公園から運ばれた「平和の火」を手に市内10区間13.5キロを走りました。このリレーは5日から7日までの3日間にわたって、徳島県下約163キロを約560人のランナーが走り、反核・平和を訴えました。



徳島県戦没者記念館—あしたへ—

遺族から提供を受けた約7700柱（うち阿南市出身者は約940柱）を超える徳島県出身戦没者の肖像写真・ご芳名とともに、貴重な遺書・遺品が数多く展示されています。また、「語り部事業」として毎月1回、戦争体験者を招いた講演会を開催し、戦争の悲惨さを語り継ぐ活動を行っています。
場所 徳島県徳島市雑賀町東開21番地1（護国神社内）
開館時間 9:00（土日祝は10:00）～16:30
休館日 年末 **入館料** 無料
問い合わせ 一般財団法人 徳島県遺族会（☎088-636-3212）へ



知られざる阿南の基地跡をたどる ～小勝島、伊島～

阿南市に軍隊基地があったことはあまり知られていません。橘湾内に浮かぶ小勝島は、昭和20年5月ごろ、海軍の第六特攻戦隊第22突撃隊が置かれ、終戦時は700～800人の兵士が駐留。基地には、島の高台の見張り台、銃座、司令部、兵舎、地下壕などがあり、特攻潜水艇「蛟龍」などが配備されていました。また、太平洋と瀬戸内海の境界線上に位置する伊島は戦略上重要で、開戦後に軍の前線基地となりました。灯台は海軍の監視所となり、その下に兵舎が築かれ、山頂には砲台も設置されていました。（写真は、ふるさと館に移設された小勝島の銃座跡）



戦後70年「写真でたどる 徳島」パネル展

戦後70年を迎え阿南市をはじめ徳島県内の復興、経済成長など、それぞれの時代の風景を写真でたどるパネル展を市役所新庁舎1階ロビーで開催しました。橘町の大谷山から見た橘湾や北の脇海水浴場、加茂谷の鍾乳洞などの写真に、立ち寄った人は興味深そうに見入っていました。数藤啓美さん（69歳・富岡町）は、「懐かしいですね。当時の町の様子がよく出てきました」と話していました。なお、パネル展は、(社)徳島新聞社と阿南市が主催し、7月27日から8月10日まで開催しました。



阿波公方・民俗資料館

戦時下の軍服や防空頭巾、銃剣など明治から昭和初期にかけて当時をしのばせる民俗資料をたくさん展示しています。また、室町時代末期より約270年間、那賀川の地に居を構えた室町將軍足利家の末裔阿波公方の歴史も紹介しています。
場所 那賀川町古津339番地1
開館時間 9:00～16:30
休館日 毎週月曜日、祝日、年末年始
入館料 一般200円、中学生以下無料 団体割引有
問い合わせ 阿波公方・民俗資料館（☎42-2966）へ